



盛り上がりを見せる日本の科学コミュニケーション：  
第1回ジャパン・サイコム・フォーラム

---

**会議名称**

ジャパン・サイコム・フォーラム  
東京、日本、2018年4月20日

**著者**

高祖 歩美 (Ayumi Koso)、アマンダ・アルバレス (Amanda Alvarez)

**要旨**

2018年4月20日に第1回ジャパン・サイコム・フォーラム (Japan Scicom Forum; JSF) が東京で開催された。日本とアジアにおける、英語による科学コミュニケーションの必要性と需要の高まりについて、約120名の参加者が熱い議論を繰り広げた。本イベントで行われた基調講演とワークショップでは、日本における科学コミュニケーションの哲学とその動機付け、そして国際的なアウトリーチのベストプラクティスが話し合われた。海外に向けた科学コミュニケーションは、日本においてその重要性が認識されつつあるが、継続的な資金の確保やコミュニティの維持など、引き続き課題が残っている。JSFは、オンラインでの共同体として、そして(願わくは)定期的なイベントとして、科学コミュニケーターネットワークを育み、英語による科学コミュニケーションが専門職として認知され、社会に浸透されていくことを目指す。

**キーワード**

科学技術の普及、プロフェッショナリズム、科学コミュニケーションの専門性開発とトレーニング、科学技術の普及、科学とメディア

---

2018年4月に開催された第一回のジャパン・サイコム・フォーラム（Japan Scicom Forum、以下 JSF、ウェブサイト：[japanscicom.github.io](http://japanscicom.github.io)）では、科学コミュニケーター、広報担当者、科学記者、研究者など、実際に国際広報に携わっているか、興味がある参加者約120名が集まり、英語による科学コミュニケーションについて議論した。昨今、日本の科学コミュニティにおいても海外に向けたコミュニケーションの必要性が高まっている。その中で、日本やアジアの科学広報のコミュニティを育み、当該分野の専門家としてのアイデンティティを向上させ、英語による科学コミュニケーションのあり方を共有することを目的とした、初めての大規模なイベントであった。終日続いたこのイベントは、東京工業大学地球生命研究所（ELSI）が主催した。参加者の約半数は外国人であり、国内の主要大学や研究機関、政府機関、助成機関、学術出版社など44の組織から参加があった。当日の基調講演の様子は、EurekaAlert! のYouTubeチャンネル([bit.ly/2lbzfHM](https://bit.ly/2lbzfHM))で視聴可能である。また、参加者らのツイートは <http://wke.it/w/s/u7FnV> にまとまっている。

日本では、近代的な科学コミュニケーションが盛り上がりを見せ始めてからそれほどの年数が経っていない。この盛り上がりは、政府が科学技術政策を公衆理解増進から公衆関与（パブリック・エンゲージメント）に転換したことによるところが大きい（Watanabe、2017）。この政策転換により、2005年ころから日本語によるアウトリーチ活動が急増した（Kobayashi、2007）。同様に、英語による科学コミュニケーションも政府のトップダウン型構想に後押しされ、その必要性が高まり活発化している。この方針の背景には、世界大学ランキングの低下や、さまざまな指標により示唆されている日本の科学立国としての地位低下がある（Phillips、2017）。2000年代以降、日本の学術研究論文の世界的なシェアは落ち込んでおり、出版された論文数の伸び率も低下しつつある。国際共著論文数が世界的に伸びている一方で、日本人研究者による国際共同研究や国際共著論文はそのペースに追いつけていない（阪、桑原、2010; 2011）。論文の引用数の減少からも、日本の科学研究の質と普及が低下

していることがわかる (Armitage、2018)。

こうした状況のなか、文部科学省は、日本の大学や研究機関の研究力や競争力を高めるため、2013 から 2014 年にかけて 10 年間の事業をふたつ (「スーパーグローバル大学創成支援事業」および「研究大学強化促進事業」) 開始した。これらの事業では、英語による科学コミュニケーションは、卓越した研究を推進するための手段として、また日本の科学研究の世界的な地位を向上させ、より幅広い聴衆に働きかけ潜在的な共同研究者、教職員、学生、助成機関の担当者の関心を集めるためのツールとして捉えられている。英語による科学コミュニケーションの需要が高まる一方で、日本の大学や研究機関はその専門的な知識や戦略を備える必要性に迫られている。こうした背景のもと、言葉の壁を越えて科学コミュニケーター的能力を高め、スキルを磨くための全国的な会を開催する期が熟し、JSF が誕生したのである。

科学コミュニケーションは、納税者 (国民) への説明責任を果たすものとする日本の研究者は、しばしばそれを国際的なアウトリーチを行わない理由として挙げる。このような考えは、妥当で説得力はあるが、近視眼的ではないかと基調講演を務めた東京大学の染谷隆夫教授は考えている。同氏は、たとえば気候変動のような社会問題は、日本の人々だけではなく海外の人々とも取り組む必要があるから、と大局的見地から英語による科学コミュニケーションの必要性を捉えている。そこで同氏は、海外メディアを通じたアウトリーチにも積極的に取り組んでおり、これまで研究成果は **Time**、**CNN** などの大手メディアにも取り上げられている。頭脳流出の阻止や国際共同研究者との連携強化など、海外メディアへのアウトリーチは有益で好機である。一方で、アウトリーチが義務化されていない場合や、そのための予算が確保されていない場合、リスクを伴う場合などには、日本の研究者にとってこうした恩恵は見えにくいのではないか。

一般向けの科学雑誌、**Asian Scientist Magazine** の創始者である **Juliana Chan** (ジュリアナ・チャン) 氏は 2 人目の基調講演

者として、科学に関する国際的な報道が欧米の研究成果に大きく偏っており、アジアの科学者が一般的にあまり認知されていない現状（「アジアの格差」）について語った。こういった問題意識で取り組む、英語の科学コミュニケーションは、文部科学省が目指す国際的な知名度や大学ランキングの向上と軌を一にしている。英語による科学コミュニケーションが単なる手段であるのか、あるいはそれこそが目的なのか、**JSF** の参加者の共感が得られたテーマの一つであった。こうした議論は **JSF** のみならず日本全体としても検討する価値がある。

基調講演に加えて、国内の **8** つの機関を代表して、科学コミュニケーターが **5** 分間のライトニングトークを行ない、それぞれのベストプラクティスや取り組みを紹介した。特にプレスリリースについて考察した発表では、熱い議論が繰り広げられた。日本語のプレスリリースは英語のものよりも一般的に詳しく、文量が多く、専門性が高い。このような差は、メディア環境、科学記者や報道関係者のニーズ、原著論文へのアクセスのしやすさが英語圏と日本とでは異なることに起因しているのかもしれない。

同日の午後には、科学記者へ記事のアイデアを直接売り込むピッチ、オープン・サイエンス、プレスリリース、**SNS** に関する実践的なワークショップが行なわれた。**EurekAlert!** の **Brian Lin** (ブライアン・リン) 氏はワークショップの中で、プレスリリースの上級テクニックとして、外国人記者やジャーナリストに、記事のアイデアを直接届けることを推奨した。同氏は、プレスリリースは大手量販店であるユニクロで服を買うイメージであるのに対し、ピッチは特定の個人に合わせて作るオートクチュールのようなものだと例え、目的も受け手も全く異なる戦略であると述べた (図 1)。**University of Southern California** (南カリフォルニア大学) の **Sarah Mojarad** (サラ・モジャラド) 氏は、時差を考慮に入れて世界中のさまざまな地域の適切な時間帯に投稿する、そのために予約投稿機能を用いることなど、**SNS** 活用のヒントを概説した。複数の言語で **SNS** を運用する場合、文字通り訳すよりも、意味を損なわない程度に意識を交えたほうが伝わりやすいという。

これまでみてきたように、日本での英語による科学コミュニケーションは、新たな展開を見せている。一方で、言葉の壁、人材や資金の偏り、制度的な課題など、いまだ多くの問題点が残されている。言葉の習熟度の異なる人々が一堂に会するのは、日本における英語の科学コミュニケーションのコミュニティにとっては、これまでも大きな課題であった。それは、イベントや団体、勉強会、運営方針等は、言語（日本語か英語か）によって分かれてなされることが多いからである。JSFを企画するにあたり著者らは、ウェブサイトやイベント告知、当日のプログラムをできる限り日英併記とし、午前中のセッションには同時通訳を入れることとした。これらの工夫により、日本人と外国人の参加比率は偏りがなかった。こうした包括的で多様性を意識した姿勢が、日本の科学コミュニケーションの質を向上させるために重要であると考えている。また、今回を機に設けた Trellis (AAAS が運営する SNS) のディスカッショングループは、コミュニティの勢いを維持し、ベストプラクティスやノウハウを持続的に交換するためのプラットフォームとして機能することが期待される。

英語による科学コミュニケーションの草の根的コミュニティを育成することは、トップダウン構想として始まった活動を持続可能なものへと導き、一方で日本の科学研究の卓越性と国際競争力を向上させるという目標達成のための方法のひとつである。日本の科学の世界的な地位の失墜、高いとはいえない英語能力という、独立ではあるが互いに関連したふたつの問題を「真に解決する」ためには、これまでのような一時的な取り組みだけでは、もはや十分ではないといえよう。2020年の東京オリンピックに向けて世界が日本に注目するなか、JSFのようなネットワークが、高等教育や科学技術政策における国際化の推進に貢献していくことを筆者らは願っている。

2020年に向けて、キャラクターやアニメなど、世界的に有名な日本のポップカルチャーを利用して、日本の科学に世界の視線を集めるのもよい手かもしれない。NASA (アメリカ航空宇宙局) の Mary Voytek (メアリー・ボイテク) 氏が基調講演内で

語ったように、こうした日本独自の文化は科学コミュニケーションの試金石、踏切板になりうる。たとえば、タイムスリップを説明する機会に見舞われたなら、Dr. Who（英国のSF番組に出てくる主人公でタイムスリップできる能力をもつ）の代わりにドラえもんに言及してみるのはいかがでしょうか？

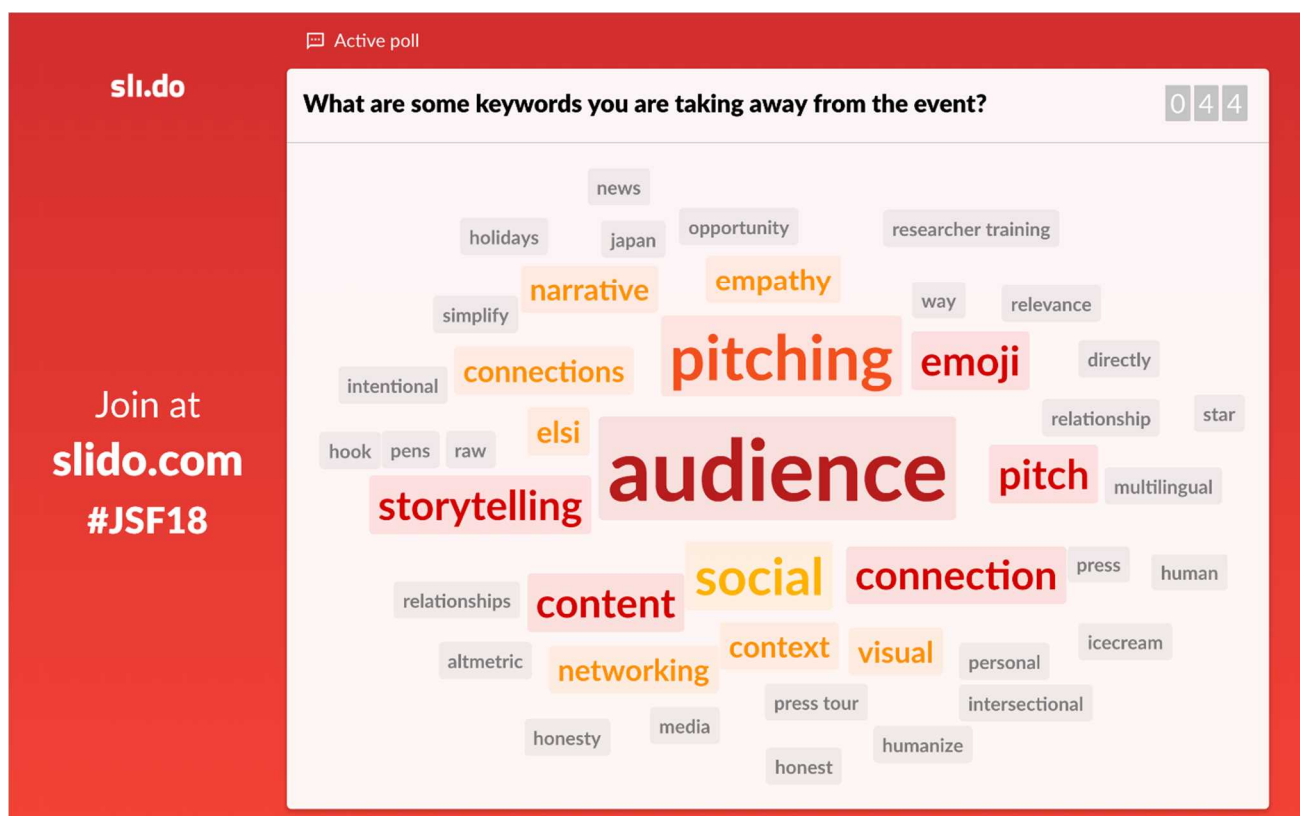


図1.

「本日のイベントからあなたが持ち帰るキーワードは何ですか？」という質問に対して得られた回答（44名の回答者）をタグクラウドとして表示。単語の大きさや色合いが、回答数の多さを表している。

## 謝辞

本稿の翻訳にあたり、理化学研究所の雀部正毅氏に協力いただいた。この場を借りてお礼を申し上げる。

## 参考文献

Armitage, C. (2018). 'Stalled ambition'. *Nature* 555 (7697),

S49–S49. URL: <https://doi.org/10.1038/d41586-018-02895-1>.

小林 傳司 (2007). 「トランス・サイエンスの時代—科学技術と社会をつなぐ」、NTT 出版ライブラリーレゾナント、ISBN-13: 978-4757160187.

Phillips, N. (23rd March 2017). 'The slow decline of Japanese research in 5 charts'.

URL: <https://www.natureindex.com/news-blog/the-slowdecline-of-japanese-research-in-five-charts>.

阪 彩香、桑原 輝隆 (2011). 科学研究のベンチマーキング 2011 -論文分析でみる世界の研究活動の変化と日本の状況-、科学技術政策研究所 科学技術基盤調査研究室

URL: <http://hdl.handle.net/11035/908>.

阪 彩香、桑原 輝隆 (2010). 科学研究のベンチマーキング 2010 -論文分析でみる世界の研究活動の変化と日本の状況-、科学技術政策研究所 科学技術基盤調査研究室

URL: <http://hdl.handle.net/11035/909>.

Watanabe, M. (2017). 'From top-down to bottom-up: a short history of science communication policy in Japan'. JCOM 16 (03), Y01.

URL:

[https://jcom.sissa.it/archive/16/03/JCOM\\_1603\\_2017\\_Y01](https://jcom.sissa.it/archive/16/03/JCOM_1603_2017_Y01).

## 著者について

高祖 歩美 (Ayumi Koso) は、大学共同利用機関法人 人間文化研究機構の特任助教/科学技術振興機構 バイオサイエンスデータベースセンターの客員研究員。ジャパン・サイコム・フォーラムの実行委員の一人。日本やアジアの学術研究機関が行っている科学広報や研究広報をテーマとした調査研究を行っている。首都大学東京大学院で博士号を取得後、科学技術振興機構や東京大学などで広報担当としてキャリアを積む。Twitter: @iyoumek. E-mail: koso@nihu.jp

アマンダ・アルバレス (Amanda Alvarez) は、日本の自然科学の研究機関である理化学研究所のサイエンスコミュニケーター。ジャパン・サイコム・フォーラムの実行委員の一人。Nerd Nite Tokyo を企画運営するほか、スイス、ドイツ、米国

でサイエンسライターとしての経験をもつ。カリフォルニア大学バークレー校から博士号を取得。Twitter: @neuroamanda.  
E-mail: amanda.alvarez@riken.jp